

こんな時代だからこそ、 チョコ募金で救いたい命があります。

JIM-NET 代表理事 鎌田 實

2015 年のチョコ募金のテーマは「いのちの花 フラワーガーデン」です。

イマーン・ファーイクちゃんは、大腸がんで肝臓転移となり、抗がん剤治療で苦しい中で、自分や自分と一緒に闘っているイラクの子どもたちのために美しい絵を描いてくれました。残念なことに、イマーンちゃんは 7 月に亡くなりました。彼女の描いたバラは、チョコの缶になりました。

JIM-NET の拠点のあるアルビルの周辺は、大変なことになっています。イスラム国 (ISIS) というイスラム原理主義集団が、油田を制圧し、武器を買い、3 万人を超す兵隊を増加させています。アメリカ・イギリスを中心とした空爆が、イラク・シリアで開始されています。シリア難民は、ついに 280 万人を超えました。イラクにも 22 万人が、主に JIM-NET が活動している北イラクに流れてきています。JIM-NET はシリア難民妊産婦の支援や、衣服の支援や、難民キャンプの乳幼児用粉ミルクの配布などを行っています。

ぼくが 9 月に出版した『1%の力』(河出書房新社) の収益の 100% を、JIM-NET と JCF (日本チェルノブイリ連帯基金) の半々に寄付しました。JIM-NET が行っている「希望の足プロジェクト」

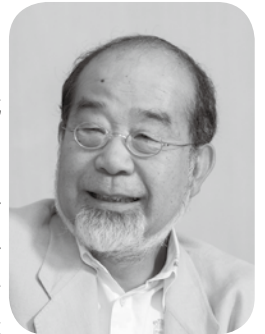
で、戦闘のなかで足を失った子どもたちの義足作りなどに役立たせるつもりです。

ISIS に対し、単に空爆を中心とした武力で戦うだけではなく、この地域に人間の、人間らしい愛のかたちを見せなければ、若者や子どもたちが兵隊にさせられていきます。今こそこの地域に、愛のかたちを見せる必要があります。チョコ募金で集めたお金で、病気の子どもたちや若者を助けようとする手

が差し伸べられることを、世間に示さなければなりません。イマーンちゃんの死を無駄にできません。彼女が命がけで描いてくれた絵は、希望や夢に満ちています。

シリアやイラク、福島の子どものいのちを守るために、チョコ募金はすべて使われます。今年も 16 万個作ります。ぜひ、口コミや facebook、twitter など、あらゆる方法で宣伝してください。この荒地を放置していけば、第三次世界大戦の引き金が引かれるかもしれません。武力で対抗するだけではなく、同時に愛の手を差し伸べることが大事なのです。

たくさんの協力をお願いいたします。



2015 チョコ募金 受付開始は 12 月 1 日 (月) 9 時から。お申し込みは <http://jim-net.org> または 03-3209-0051 へ。



NEWS

「こんな時代だからこそ、チョコ募金で救いたい命があります」

JIM-NET 代表理事 鎌田 實P.1

2015 のテーマは「いのちの花 フラワーガーデン」です。

JIM-NET 事務局長 佐藤真紀P.2

演劇「やわらかい服を着て」

出演者インタビュー (Part2)P.3

【福島支援】笑顔がつながる、明日がつながる“カカオクッキー wa”

吉澤真満子 (特定非営利活動法人 APLA 事務局長)P.4

2015年のテーマは「いのちの花 フラワーガーデン」です。

JIM-NET 事務局長 佐藤真紀

「いのちの花」

本当の花は生きているから、
私たちに力を与えてくれます。

イラクのがんの子どもたちも生きている花を見ながら、ちょっぴり幸せ
になって、絵を描きました。

チョコの缶になった絵を見た人たちが嫌なことを忘れて

幸せな気分になってくれたらうれしいです。

もっと、たくさんの花が咲いて、もっともっと、幸せな気分になって
世界が平和になればいい、そんな思いを込めて作りました。

✧解説✧

イラクのがんの子どもたちに絵を書いてもらったら、花の絵を書く子
どもがたくさんいます。花の形は、幾何学的にも描きやすく、色も塗り
やすいから、子どもたちは楽しみながら絵を描きます。しかし、今回こ
だわったのは、本当の花を子どもたちに描いてもらうことでした。花が
咲き乱れる4月のアルビルに滞在し、まず、花の絵を集めることから
始めました。

【芥子】ハニーンは、ファルージャ
で生まれました。2014年の初めに
体調を壊し、病院で白血病の診断が下
されました。しかし、既にイラク軍と
イスラム国の衝突が始まり、病院に通う
こともままならぬ状況になっていたため、
一家は、ナナカリー病院のあるクルド自治
区のアルビルに避難することを決意。しかし、市内にアラブ人が家を借
りるのは難しく、北東に30km離れたシャクラワから通っています。ハ
ニーンちゃんたちは、クルド人の学校に行くこともできず家ではTVを
見ていることが多いようです。TVでは、毎日、故郷ファルージャでの戦
闘や、民間人の死体などを映したニュースが流れていて、お父さん、お
母さんが心配そうに見ています。4月のある日、投薬を終えたハニーン
を家まで送ってあげました。家の周りにはこの地域に独特な真っ赤な野
生の芥子が咲き乱れていました。摘んできたばかりの芥子の花。ファル
ージャでは見たこともない花にハニーンもうっとりして、一生懸命書いて
くれました。

しかし、家族は家賃を払い続けるのが難しく、さらに離れたカルク
ークに安いアパートを見つけ引っ越しました。ところが、その後カルク
ークが「イスラム国」との激戦地になってしまい、ハニーンもなかなか病
院に来られなくなっているそうです。

【ガーベラ】ナナカリー病院に来
る子どもたちを、プレールームに
あつめて、「Happy」なワークショッ
プをやるということになりました。
榎本職員、田村看護師もケーキを
買ったり、出し物を用意して、Happyに
なってもらうという趣旨。私は、ナナ
カリー病院の庭に咲いている花を摘んで
飾りました。しかし、段取りが悪く、通訳してくれるペイマン医
師も、別の用事で途中でいなくなるし、クルド語がさっぱりな私たちは、
子どもたちとのコミュニケーションもうまくいきませんでした。

しかし、カーヌ君のかいたガーベラの絵が素敵です。

10月の犠牲祭。カーヌ君はどうしているかなと気になって、休み中の
病院に行くとカーヌ君が抗癌剤の点滴に来ていました。カーヌ君は兄弟、
姉妹15人という大家族。お父さんは、ペシュメルガというクルドの軍
隊で働いているためになかなか家に帰ってきません。病院には、散髪屋
をやっている義理のお兄さんが連れてきてくれます。私たちは、お兄
さんが運転する車で、家に招待され、家庭料理をごちそうになりました。
犠牲祭で帰ってきたお父さんは、前線で戦っている写真を携帯で見せて
くれました。

最近、「イスラム国」がクルド自治区にも攻撃を加えており、犠牲
者も出始めています。TVでは、夫を戦闘で亡くした妻と子どもたちの
インタビューを放送していました。お母さんは、カーヌ君の治療のこ
とを心配する一方で、お父さんのことも心配でなりません。

【バラ】4月21日、アルビ
ルの最終日。ナナカリー病
院での打ち合わせを終えた
私は、飛行機の時間を気にし
ながら、病室を覗きに行きまし
た。廊下にバラの花を持って立っ
ている少女が視界に飛び込んでき
ました。「どうして取ってきたのか



しら？お花にも命があるのよ。」先生に諭されて、その子は少ししょんぼ
りしていました。「その花、絵にしようよ」私は、彼女を2階にあるプ
レールームに誘いました。彼女はゆっくりと、花びらを書いていきます。
花びらを見つめているときは、サインペンが止まり、にじんでいきます。
そして、ゆっくりと花びらに水彩絵の具でピンクの色を置いていきまし
た。そして、彼女はゆっくりとほほ笑んでくれました。名前をお願いす
ると英語で EMAN と書いてくれました。「この子がイマーン？」3月に
派遣されていた佐藤麻衣子によると、イマーンのがんは末期で、後一か
月もつかどうかとのことでした。ほかの子どもたちが、大きな絵を床に
座って書いていたのに、彼女は体が痛くて座ることもできなかったそう
です。その時にイマーンが描いたのが「バラのつぼみ」で、私は、プロ
グで紹介されたこの絵が大好きになりました。

その後、あわてて飛行機に乗り込むと、さっそく機内の中で、イマ
ーンの絵をデザインしてみました。ところが、彼女のバラの花。これを、チ
ョコ缶の○の中に収めるのが実は結構難しく、最後の最後まで苦労しま
した。

何とか、彼女に完成した缶を見てほしい。できたばかりのチョコ缶を、
シリア難民妊産婦支援にアルビル入りする国井看護師に持って行っても
らいました。

6月27日 田村看護師は次のように伝えていきます。

体力も通院の度に落ちており、いつどうなるか予測できないとのこと。
病室に入ると、ゴホゴホと咳き込みながら点滴を受けるイマーンの姿。
以前よりもさらに痩せたのは見てすぐにわかりました。チョコ缶を渡す
と、細い腕で缶を持ち、微笑む姿は健気で見てこちらのたまらない
気持ちになります。イマーンは本当は笑ってられないくらいつらいのに、
いつも私たちが来るとこうして笑顔を見せてくれるのです。私たちがど
うしても伝えなかった事、『イマーンの描いてくれた花が、これからも
ずっとナナカリー病院に通う子どもたちを助けてくれるんだよ、ありが
と』という想いをイマーンに届けることができました。」

しかし、一か月後、イマーンは、帰らぬ人となりました。＊遺族を訪
問した時の記録は、HPで紹介していますのでそちらをご覧ください。

【ひまわり】イラクに咲く花で、欠かせないのはひまわり。このひまわりは2011年、東日本大震災直後に、サマーワのハウラが描いてくれたものです。ハウラは、白血病を克服しすっかり元気になりました。ハウラの絵は、絵本「ハウラの赤い花」や映画「瞬き」（北川景子、岡田将生出演）にも使われるなどその才能は高く評価されています。チョコ募金も6回目の登場です。これからの彼女の活躍に期待。来日の可能性もうわさされています。



✧缶に書かれているアラビア文字✧

「いのちの花」をアラビア語で書いてくれたのはオマルさん。シリア難民で、アルビル城の向かい側の小さなお店で看板の文字を書いて生計を立てています。シリアでは、コバニというところで美術の先生をしてい

ましたが、2年前にアルビルに避難してきました。9月半ばからコバニは、イスラム国に包囲され、クルド民兵との激しい攻防が続いています。18万人が難民としてコバニを脱出したとも言われています。アメリカも、空爆をこの地域に開始し、情勢はますます不安定になっています。オマルさんは、「親戚は全員コバニから避難しましたが、今どこにいるのか心配です」

✧僕ははかなくない！✧

今回のチョコ募金、絵を書いてくれた子どもたちの周りにも、戦争の影響が表れています。

缶に書かれている英語、I am not ephemeral. (僕は、はかなくない)

これは、イギリスのデザイナー、アレックス・リッチが、僕らの活動とイラクのがんの子どもの花の絵を見て、Tシャツを作ってくれたことがありました。その時にTシャツに描いてくれた言葉です。戦争の中で生きていく子どもたち。しっかりと輝いて咲く花のようです。

これからもチョコ募金は、子どもたちの輝きを伝えていきたいと思います。

演劇「やわらかい服を着て」 ～国際支援 NGO で働く若者の群像劇～ Part2

7月10日から13日まで、演劇「やわらかい服を着て」が東京・上落合にある劇場「TACCS1179」にて上演されました。同作品は、JIM-NETの活動をモデルに劇作家の永井愛さんが書き下ろし、2006年5月に初演されたものです。今回の上演は「UMANプロデュース」による再演です。

物語は2003年、イラク戦争開戦前夜から2006年までのNGO「ピース・ウィンカー」の活動を追います。イラク戦争当時のNGOの活動をどう演じ、どう変わったか。俳優さんに現在の心境をインタビューしました。9月号に引き続き、Part2を掲載します。(2014年9月2日：インタビューアー 崔麻里・竹内弥生)

【Part2】

村山 歩さん(田中あこ役) 元気なムードメーカー(写真左)。
高谷雅志さん(若島大吾役) 会社員の傍ら活動に参加(写真中)。
永栄正顕さん(栗山礼史役) サブリーダー。地道な支え役(写真右)。



——今回は皆さんよく本当に勉強されて、血となり肉となった状態で演じてくださったので、観ているほうも熱くなりました。

村山:演じていた期間、私たちがNGOの世界にいた感覚が強いですよ。NGOのことを一から勉強して、知ったことがすごく多かった。いや、なんて浅はかだったんだろう、考え方が…。

高谷:NGOって正直最初知らなかったんですよ。活動内容を知っていくなかで、実際一番変わったのは、行動するようになりましたね。

高谷:例えばデモあったじゃないですか。あの舞台の時に。

村山:速攻だったよね。稽古場で、今日あるからって。で、演出家にも言ってみなで。稽古もあるけど行きたい人って言ったら、みんな「はい!行きたい、行きたーい」って。街角で署名活動も気になります。前は「お願いしまーす」って言っている、すみませんって過ぎちゃったんですが、今はとりあえず何だろうって。

——すごい変化ですね。

永栄:ぜんぜん、違いますね。スルーしていたものが、どうしても目に入っちゃいますね。山本美香さんなんかの本も読んで。やっぱり終わっても続いていますね。俳優って、そういうのが楽しいよね。



村山:舞台も終わると結構ぬけて、次の舞台の世界観に切り替わるんです。でも「やわらかい服を着て」は引きずっています。そのあとにも何本か(芝居を)やってるんですけど、ずっと着てますよ、やわらかい服を(笑)——最初不思議なタイトルだなと思いました?

村山:思いました。なんとなくニュアンスが素敵な題名っていうのはあったんですけど…お客さんもいろんな見解があって。お客さんのパワーは感じましたね。

高谷:引くお客さんがいなかったですね。

村山:NGO、イラク戦争っていうと、難しいお話なのかなって、最初は思っただんですよ。でも台本読んでくうちに、誰もが同じ人間、同じ地球に生きてるっていう、共通のテーマって思った。全然難しい話じゃない。——印象に残ったシーンや台詞はありますか。

永栄:「今日は3月20日だね」(2003年イラク攻撃開始の日)。

高谷:みんなが通じるシーンでしたね。

永栄:あの台詞を書いた永井さんはやっぱりすごいよね。説明しなくてもわかつちゃう。

高谷:全部の伏線があそこにあるんじゃないかって思う。

永栄:だって下手な作家だったら、いろいろ説明しちゃうからね。

村山:私、イラクのことについて話をする台詞がないんですね。明るい役で、語るシーンがない…。自分の役の役割はなんだったんだろうって、考えたんです。辛い中でも何かのために強く活動している人の、等身大になればいいなって思って演じていました。全体の中では、一平(主人公・リーダー)の「みんな通り過ぎて、何のためにやってるんだろう」っていう。なんかあれも感じる事なので、私はすごく印象に残ってますね。

高谷:自分の台詞で「たかだかチョココレート20個でこれほどまで盛り

上がる姿を見てしまうと」という台詞があったんです。チョコレートは20個で1万円ぐらいなんですけど、その1万円っていう価値っていうのはふつうの人の1万円ではなく重たさもある。その1万円という価値で、メンバー全員の絆が深まる。

——苦労したものだからやっぱり伝わるんですよ。

村山：彼（高谷さん）は初舞台だったの。

——え、本当ですか！初舞台だったんですか？

高谷：はい。

村山：そうなんです。だからもう、どうやって立ったらいいかもわからないみたいな。顔半分しかなかったよね、やせちゃって。

高谷：ご飯食べられなかったです。僕がお誘い受けたのは5月とか6月ぐらいだったので、たぶんそんな内容（イラクの状況）とかも日本に流れてない時だったので。最初の時は参加しづらいついていうのが何かあった。NGOは遠い存在でした。

——舞台を踏む前と踏んだ後のNGOの見方はどう変わりましたか。

永栄：全然違いますよ。初めて（JIM-NET 事務所）に行ったとき、緊張しましたね。おまえ先行けよって（笑）。で、行ってみたら佐藤さんは気さくな方で。

高谷：最初、佐藤真紀さんって女性だと思って。ホームページで顔写真を見てこれだと。すぐにおおらかな人だということが第一印象でしたね。全部受け入れられて、行動することができるってイメージがありました。2回目に行った時に、赤べこのサッカー作ってましたよね、でも実際のそのワールドカップでイラン、イラクとか勝ったりすることによって、本当に死者数が減ったり。グラフを見て、すごい僕感動して。

永栄：ビデオとか見せてくれたのがよかったですね。あの戦車の上で遊んでる子ども…。

高谷：劣化ウラン弾の。撤去されないって。

永栄：だからそのあとにみんなでお昼食べたんですけど、盛り上がりました。

——子どもたちの絵画展をやる意味についてどう思いましたか。

高谷：日本の子どもとイラクの子どもの絵画展をしようって話で。大吾（役）も、僕自身も、知ってもらって共感してもらうことが必要だと思ったんですよ。そういう意味でも意味がある絵画展。でもその中で、千秋

（冷静な実務家）が言っていたのは、開催のタイミングが情勢に合ってるかどうかということ。一方的にやっても、伝わらなかったり。

——千秋と礼史が絵画展やるべきじゃないって言うシーンについてはどう思いましたか。

永栄：そこなんですよね。僕だったらやった方がいいと思うのに、礼史（役）は違うこと言ってるじゃないですか。でも礼史の言ってることもよくわかりますよね。そのシーンのちょっと前で、一平はまず戦争が始まるのが信じられないって言う。礼史は戦争が始まることを考えて、次にどうすればいいかってことを考えてる。

——子どもたちの絵はどうですか。

永栄：心打ちますね。佐藤さんの絵本を買ったんですけど、もうすごいよね。あの絵が一番心打ったよね。

——ちなみにどの本ですか。

高谷：佐藤真紀さんの『戦争なんて、もうやめて』（2004年、大月書店）ですね。

永栄：どんな名画よりも価値があると思ったんですよ。何億円よりも価値がある絵だって僕は思った。

——舞台を見ていないけれども、支援をしてくださっている方々にこの舞台を通じて何を伝えたいですか？

永栄：「自己責任論」ですが、2004年当時、僕は「（人質になった）3人が悪い」と、メディアの情報を鵜呑みにしていました。でも佐藤さんの本に、あの3人のお話、特に一番若い今井さんの記者会見のことが書いてありますね。自己責任って言うけど、戦争をおこさせた日本の自己責任はどうとりますか？って。納得のいく正論だと思います。だからちょっとメディアを疑うようになりましたね。表面だけなぞっちゃだめだって。

村山：やっぱり「同じ人間だ」っていうことですね。私たちは現場で見たわけじゃないですけど、映像を見て、役としてイラクに行った仲間がいる。この人は行ってきただって思って、接して、演じて、経験させてもらった。他人事じゃない。人種が違ふとかではなくて…。大きくなれずに亡くなった子どもたちがいるってことを、今も考えます。ああ、なんて力が足りない、ひとりの力では何もできないなって思いますね、いつも。

【福島支援】

笑顔がつながる、明日がつながる “カカオクッキー wa”

吉澤真満子（特定非営利活動法人 APLA 事務局長）

以前 JIM-NET 便りでもご紹介いただいた “カカオクッキー wa”。JIM-NET、アユス仏教国際ネットワーク、APLA、オルター・トレード・ジャパンが協力して開発しました。

3.11 の原発事故以後、それぞれが福島での活動を模索してきました。その背景には、エネルギー大量消費社会への反省があります。原発の問題に限らず高い割合を占める火力発電も、原料の石油の利権をめぐるイラクで戦争が起きたこと、カカオの産地インドネシア・パプア州でも天



然ガス開発により地元で衝突が起きていることなど、海外と日本で起きているエネルギーの問題は、自分たちの暮らしと深くつながっていることを改めて考え直す時に来ている。このことを伝えながら、誰も傷つくことのない世界を創りた

いと、福島にある福祉施設でクッキーを作ってもらい、売上の一部を自然エネルギー普及のために使う仕組みを作ることになりました。

原発事故から3年半以上が経ち、まるで事故がなかったかのように世の中は動いています。「再稼働の話なんて、自分たちの苦しみは救われない」という農家の方の言葉、「家族や地域の中でも放射能に対する様々な意見があり、抱えている不安を周りに話すことがはばかれる。それでも、子どもたちの未来のためにできることをやる。そして、皆さんには、私たちのことを忘れないでほしい」と、涙ながらに語ったお母さんの想い。カカオクッキー wa は、福島と私たちをつなぐクッキーでもあります。

●お問い合わせ

APLA/ あぶら Alternative People's Linkage in Asia

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2-4-15 サンライズ新宿 3F

TEL: 03-5273-8160 / FAX: 03-5273-8667

HP: <http://www.apla.jp>